

雑誌『文学案内』と上京青年の交錯

小野民樹

1 はじめに

一九三四年（昭和九）二月二日の日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）解体によって、組織的なプロレタリア文学運動は消滅し、「昭和文学史」のうえでは、転向と転向文学の時代が始まった。しかしその時期に、意識的にプロレタリア文学の継承発展をめざした雑誌『文学案内』が創刊されている。一九三五年七月一日発行の第一巻一号から、三十七年四月一日の第三巻四号で廃刊するまでに、貴司山治（きしやまじ）が創立した文学案内社から二二冊が刊行された。この雑誌の編輯責任者は第一巻二、三号が貴司山治、丸山義一、四号から第三巻一号までは貴司、丸山、小野春夫、二号が貴司、丸山、遠地輝武、三号は貴司、遠地で、終刊号には記載がない。

本稿は、この『文学案内』の雑誌編集の面と、それに関わった上京青年たちに注目し、時代の断面を素描しようとしたも

のである。上京青年とは、立身出世型や単なる田舎出の若者とは違い、それぞれの地方でなんらかの文化的刺激を受け、そのために故郷を捨てて、東京にやってきた青年をさす。彼らの上京の時期の僅かな違いがその後の人生に大きな違いをもたらす時代でもあった。

『文学案内』は、三四年一月に「転向」した貴司山治の最後の抵抗の試みであった。

2 上京青年

一九三四年六月のある日、吉祥寺の貴司山治の家を、岡山から上京してきた二五歳の青年が訪ねてきた。その青年小野春夫（おのの）は、一九〇八（明治四一）年四月二三日、岡山県吉備郡箭田村に生まれた。戸籍では、父小野甚次郎、母平岡愛代、届出は母である。形式的に親戚に養子にだされ、もどされるという複雑な経緯から、甚次郎の長男となるのだが、実母は

背が低いために小野家を追われ、自分は継母から苛酷な差別を受けたという感情を生涯もち続けた。

岡山の屋敷は小川を挟んで建てられ、深い井戸をいくつか掘った代々の造り酒屋であったが、甚次郎の代に家業をたたんだ。比較的に温和な気候の吉備地方の程度の家であったといえよう。

晩年の著書の著者紹介によれば、尋常小学校時代にビクトル・ユーゴーの「噫、無情」に感激、文学に憧れ、大杉栄虐殺の甘粕大尉助命嘆願書に血判したこともある。反抗的で停学をくりかえしつつ倉敷商業卒業、その後同志社高等商業中退、関西大学卒業とあるが、大学には一日も行ったことはない。小作人の貧窮に憤り、正義感と反抗心の赴くままに、全国農民組合全国会議派（全農全会派）の闘争に参加、農村に出没するとともに、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）岡山支部員となり、文学修業にはげんでいる。岡山県南部は農業機械化の先進地帯で小作争議が頻発、とくに小作料永久三割減を要求した藤田農場の大闘争は全国的に知られていた。

アララギ系統の短歌誌『吉備びと』に発表した小野の獄中歌が、『昭和万葉集』第一巻に収録されている。

極月の留置場はさむし夜となれば詐欺の男と肩よせてね
る

ひと月をとにもくらし強盗は体をだいにといひ送検
られていく

『山陽新報』の懸賞小説に、自村の農民を描いた小説「薩摩の武士を斬った百姓文十」が入選、それをきっかけに山陽新報社に記者として採用されるが、夜は組合事務所詰めている生活だった。三年の県下左翼一斉捜索で検挙、新聞社の奔走で釈放されたが依願退職し、ナルプ岡山支部の紹介状をもって上京。阿佐ヶ谷の立野信之を訪ねる。立野は下宿をみつげ、日大二高の夜学の教師におしこんでくれ、吉祥寺の貴司山治を紹介したのである。そんなことを、貴司に話したのだろう。

貴司も一〇年前に瀬戸内から、文学で身をたてようと上京してきたのだ。

*

貴司山治は、一八九九（明治三二）年二月二日、徳島県鳴門に生まれた。本名伊藤好市。一九三二年の自筆年譜によれば、「家は小ブルジョア階級。村の小学校を卒えた後は両親のために家業に酷使され、後村書記になったり、村の労働者を中心に作られた消費組合の使用人になったりして働いた」とある。

貴司は労働の合間に手当たり次第の濫読、一三歳で小説家になる決心をした。どんな本を読んだか詳らかにしないが、そのころ普通の家庭に普及していた講談本などの語りの要素を生かした文体は少年の記憶に沁みとおっていったと想像される。さらに、賀川豊彦、河上肇の啓蒙書により、社会の矛

盾に目覚め、ロシア革命のころには、地元の塩田争議の指導者たちと親交を結んだ。

二〇年に『大阪時事新報』の懸賞小説に応募し「紫の袍」が三等入選、それをきっかけに故郷を捨て、大阪に出て、『大阪時事新報』の記者となり、二五年まで勤める。この年、『時事新報』の懸賞小説に応募し入選、作品は、翌年一月一日から一八二回「新恋愛行」として連載された。大阪を舞台とする通俗恋愛小説である。このとき、菊池寛に「純文学ではメシがくえんよ、大衆文学をやりましたまえ。これからは大衆文学の時代だ」とすすめられたという。

続いて『朝日新聞』の懸賞にも入選、「霊の審判」は二七年一月二三日から一〇一回、東京、大阪両朝日新聞に連載された。原題は「人造人間」、手本にしたのは、ジュール・ロマンの『科学の奇蹟』であった。貴司は、その当時共産主義に対する理解はなく、革命には否定的で、センチメンタルな正義感をもつ人道主義者であったと自己規定している。

一九二八（昭和三）年三月二五日には、三・一五の共産党への大弾圧事件を契機として、全日本無産者芸術連盟（ナツプ）が結成され、二月に全日本無産者芸術団体協議会（ナツプ）と改称、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）など芸術五団体が参加する運動組織となり、プロレタリア文学の最盛期を迎えた。

3 プロレタリア大衆小説

一九二八年、貴司は連日昼までに東京毎夕、大阪時事、九州日報の連載を一回分ずつ片づけ、午後はその他の原稿の執筆を続け、一躍流行作家となった。しかし単なる通俗小説にあきたらなくなってきた折から、「本所深川京浜方面の労働階級に読者を持つ」『東京毎夕新聞』からの依頼に、友人の評議会や労働運動幹部たちの闘争経験をそのまま取り入れた「止れ・進め（副題ゴー・ストップ）」を書き、八月から四月まで連載された。連載期間中に友人の画家柳瀬正夢に頼まれて、『無産者新聞』に「舞踏会事件」を一月一五日から二月二〇日まで七回連載した。この作品は、連載一回分に巧みに伏線と山場を設けながら、支配階級の偽善的な生活と警察権力の卑劣な弾圧、そのなかに労働者階級の目ざめを描いている。テンポと歯切れのいい文章は、図式的に過ぎると思いつつも一気に読ませてしまう力もっている。売出し中の大衆小説作家のプロレタリア文学への越境が注目を集めた。

この作品をきっかけに二九年二月、貴司は日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）に加入、三〇年には中央委員となった。「その頃、プロレタリア大衆文学の創造ということを考えていた私は、労働者の組織が壊滅状態となっている時、その恢復に何らかの意味で役に立つ労働者のための読み物を、プロレタリア大衆小説として書いてみようと考えはじめていた」

「止め、進め」は、スリのチンピラ少年が、小学校担任の変わった教師の世話で東京江東地区のガラス工場の職工となり、評議会指導による激しいストライキのなかで、次第に階級意識に目覚めていく物語。そこに絡むのが、先生の教え子で工場主の妾の美人女優やいわくありげな妖艶な女たち、スーパーマンのような評議会のストライキオルグ、戯画化された陰險な資本家とその取り巻きと警察官たち……、実際の浜松楽器争議の展開を、そのまま舞台を変えて使ったものであるという。連載の途中で、戦旗社から出版の申し込みがあったが、貴司は断った。はじめてのプロレタリア小説を一般の出版社から出して、広い読者に読まれたいと考えたのだ。

結局は、『ゴー・ストップ』と改題し、表紙に「プロレタリア大衆小説」と銘打って、一九三〇年四月一日に中央公論社から刊行された。発行部数二万部、しかし四日後に発売禁止、全国の書店在庫は差し押さえられたが、すでに一万一〇〇〇部が売れていて、八〇〇〇部が社の倉庫に残っていた。貴司は編集者と共謀、八〇〇部のみ残本として警察に提出、改訂版一万部と外箱一万八〇〇〇個を急遽注文、元本八〇〇〇部も箱に入れて一緒に売れることを提案、しげる嶋中雄作社長をそのかして、二五日に発売して完売したのである。

〔わが文学史〕

*

さて、貴司の「プロレタリア大衆小説」は、蔵原惟人を中

心とするナルプ中央委員から激しい批判にさらされた。二八年から四回にわたるプロレタリア文学大衆化をめぐる論争の経緯は、尾崎秀樹の「貴司山治論」にゆずり、ここではふれない。作家たちは、権威ある理論家の「プロレタリア・レアリズムの貫徹」「芸術運動のボルシェヴィキ化」といったロシア直輸入のスローガンに右往左往する喜劇を演じている。

例えば、小林多喜二の『不在地主』は、「泥壁には地図のように割目が入っていて、倚りかかると、ポロポロこぼれ落ちた。——由三は半分泣きながら、ランプのホヤを磨きにかかった。ホヤの端を掌で抑えて、ハアアと息を吹き込んでやると、煙のように曇った。それから新聞紙をまるめて、中を磨いた。何度もそれを繰返すと、石油臭い匂いが何時迄も手に残った」とはじまる。

その三二年に出た単行本のまえがきに「この一篇を、『新農民読本』として全国津々浦々の「小作人」と「貧農」に捧げる。「荒木又右衛門」や「鳴門秘帖」でも読むような積りで、仕事の合間々々に寝転びながら読んでほしい」と書いているが、文字通りの意味では、とても無理というものであるう。

これに対して、三〇年の貴司山治『ゴー・ストップ』の単行本冒頭は次のとおり。

「野々村参平が築地河岸を歩いていると、

「助けてえッ……」

という女の金切り声をした。

「おや？……」

と思つて、彼は闇の中をすかして見た。

築地市場の方にある人通りのない淋しい橋のたもとに、白い人影がちらりとみえた。

「よし！」

と参平は浴衣の尻をまくつてその方へ走つて行つた。

走りながら、——夜がふけるとまるで人通りのないこの辺を彼れはいつも散歩する時に、東京にもこんな暗い所がある——これだから女などは危いのだ——と思つたその考えが頭の中を掠めた。

「おい！ どうしたんだ？」

——すぐに、かれは橋のたもとまで来た。

そこには白い着物を着た若い女が一人、橋のまん中に倒れ、声を立てて泣いているのだ。あたりをすかして見ても、ほかにはだれもない」

山田清三郎によれば、貴司の『ゴー・ストップ』は、「主題性にかんするかぎり、それはプロレタリア文学の本筋を行くものであった。……ナツプで批判されたのは、大衆化が卑俗化の方向にもとめられ、事件の組み立てが偶然性の連続にきずかれていて、必然性と現実性を欠いていることと、とくに鳥羽（争議の指導者）にみられるあやまったプロレタリア英雄主義であつた」。

いくら組織で論争をして、「形式の単純さと明瞭さ」を規定した「正しい」決議をしようとも、そんなことでいい作品が生み出されるわけでもないだろう。貴司は間違つた英雄とされた指導者たちは現実に存在しているにもかかわらず、作者の「観念の産物」だという「観念的な」批判に反撥したが虚しかった。

貴司は、『文学新聞』（作家同盟機関紙）編集長を引受け、『忍術武勇伝』『チタの烙印』『バス車掌七百人』などを『戦旗』に書く一方、朝日、読売、中央公論、改造、文藝春秋、新潮等いわゆるブルジョア新聞雑誌にも執筆を続けた。その間、三二年四月に治安維持法違反により逮捕され、三三年一月に保釈出獄、その二月二〇日には小林多喜二が築地署で虐殺された。貴司は官憲の監視をかくぐり、デスマスクや写真の写真は、貴司の撮影したものである。

三四年一月に杉並署に再検挙され、三月に保釈。二月二二日にナルプは貴司の留守宅で開かれた拡大中央委員会で解体したことを、貴司は獄中で知つた。

「私には支持する党も、守るべきナルプもなくなつてしまつたので、「政治性のある活動はしない」という「転向」の一文を朝日新聞に書いて、警察と裁判所から解放され」た。六月二九日に判決公判、懲役二年執行猶予四年であつた。

貴司は、一九三五年一月一日の「日記」に書く。「私にとつ

ての去年一年間は基本的運動の破滅のあとをうけて、その支隊たる文化運動組織の必然の敗北の中で、滅多うちにたたかれて逃げ廻りながら、ふみとどまるべき新しい地歩と、新しい身がまえとを作りだすための猛烈な努力と準備の一年間に終った。そして、とにかく、私は自分一個の文学陣を敷いたつもりだ。実録文学というものの提唱から、実録文学研究会を作ったこと、今年中に『文学案内』という雑誌を出すことに決心したことは形の上での私の文学陣である」

4 文学案内

一九三五年、『文学案内』創刊号が七月一日に発行された。貴司は「創刊の挨拶」で、「働く者の立場に立つ文学」をスローガンに掲げ、それは「直接、働く者の生活の内部を描き、かれらにその明日を感じしめるような、深い感銘を与えるものでなければならぬ」と書いた。かつて貴司の目ざしたプロレタリア大衆文学の実現である。

刊行の資金は当面、貴司の原稿料である。創刊号から三号までは宣伝のために無料にし、四号からは一三〇頁三五銭、一〇〇〇人の直接購読者の確保を目標とする。目標達成のときには、一四〇頁三〇銭に値下げすると宣言した。そして三ヶ月分以上払い込んだ場合、「誌友」となり、文章の添削批評を受けられ、ゴリーキーらの肖像写真や作家の色紙をもらえる特典をもうけた。柳瀬正夢に写真技術を教え、現像焼付

まで自宅でこなす写真のベテランだった貴司がソヴィエトのグラフ雑誌に載った写真を複製して、サインもする手作りののである。無料の創刊号は一六頁、三〇〇〇部作ったが、三〇〇部が足りなくなった。誌友の獲得は五〇〇〇人であった。雑誌で目につくのは、貴司の鋭敏なジャーナリスト感覚と経営的な目配りによる柔軟な編集である。

編集顧問として、プロレタリア文学系以外で徳田秋声、広津和郎らの協力を得て、執筆者はナルプ時代の対立を超えた幅広い作家たちが登場することで、進歩的大衆雑誌をめざした。

「文壇の巨匠に訊く」は、徳田秋声、志賀直哉、山本有三らに対する、貴司のインタビューで、志賀直哉の「小林（多喜二）君が自分の芸術的才能を十分に出す暇もないくらい政治的な仕事に忙しかったということは、必ずしも小林君自身にとつて、またプロレタリア全体にとつてもそれほど幸福だったかどうか」といった言葉を引き出している。

『文学案内』の売り物である「多くの進んだインテリゲンチヤ作家、既成の労働者出身作家等にたのんで、働く大衆の中の、文学好きの人々に小説や詩や戯曲の作り方、書き方をくわしく、深切におしえ、手引きする」ために、「つくり方講座」を連載した。貴司の「小説のつくり方」をはじめ、戯曲を三好十郎、詩を遠地輝武、叙事詩を小熊秀雄、短歌を渡辺順三が担当した。

また、貴司は、朝鮮、中国、台湾の文学と作家たちの動向を張赫宙、楊達、雷石楡に依頼して現状報告という形で掲載し、「朝鮮現代作家特集」「朝鮮台湾中国新鋭作家集」も組んでいる。ヨーロッパのファシズムと人民戦線の帰趨に関心を集中し、スペイン、ドイツ、メキシコ、ハイチの「世界文学の現状報告」を特集している。魯迅とはずっと連絡を保ち、三六年九月号には、「忘却の記念のために」を鹿地巨訳で載せることができた。

*

文学案内社は、発刊後すぐに東京市四谷区坂町から、京橋区銀座西一丁目に移転した。新築地劇団の隣である。文学案内社の社規は一日八時間労働で週五日制、日曜の他一日の各自の休みがある。「マジメすぎて、たった今どこかで叱られてきましたというような顔をしている」小野は、麻布の下宿先から入社して仕事をこなしていると、社員の松原が書いている。「机上ハイキング」欄の「田舎なまりの便不使」で、岡山出身の小野が編輯室を出て外回りをすると、言葉がわからないと苦情がくる。たいていは注意しているが、ときに岡山弁丸出しになる。富士登山で足にまめをつくった丸山に、「丸山さん、まだまめがまめにならんのか」という具合である。他の二人は上京以後一〇年以上経っているから、すでに訛を克服したのだろう（三五年一〇月号）。

丸山義二は、一九〇三（明治三六）年二月二六日に、兵庫

県揖保郡誉田村に自作農の長男として生まれた。村は貧富の差は少なく三〇戸が平均一町歩ほどの農地を分け合っていたという。一六年に父死亡のため県立龍野中学校を中退させられ、地元醤油会社に給仕としてつとめる。二〇年ころから同人雑誌に参加し、詩や短歌を発表した。二二年上京、苦学しつつ小説を書く。二六年四月に入社試験を受けて、萬朝報学芸部の記者に採用され、一月から学芸欄に「ある農村のスケッチ」を連載、故郷の村の金融恐慌の悲劇を調査して、はじめて農村問題の深刻さに気付いたという。折からの不況に、給料の遅配欠配、病氣の子どもを二人まで失う追いつめられた自分の生活にくらべ、資本家と軍人だけは肥え太る社会の不正に怒りを感じた。

そこで、短編「拾円札」を書き、『戦旗』に持ち込み、二八年一二月号に載った。三〇年にナツプに加盟、三一年一〇月にはナルプの機関紙『文学新聞』（旬刊）の編集に参加、翌年四月まで続ける。編集部長が貴司であった。三三年に萬朝報社を退社、筆一本の生活は無理とみきわめ、経済雑誌社に勤める。そして三五年の文学案内社創立に参加することになったのである。

*

一九三六年元旦は『文学案内』の関係者たちが貴司の家に集まり、五升の酒を飲んで、深夜まで騒いだ。ところが八日、印刷屋の都合で二月号が予定通りにできないと判明、二月号

は代金引換でないと渡さぬとごね、預けてある一〇〇円分の用紙も返さないと息巻く。貴司は印刷屋の残りはごく一部で、大半は製本屋にまわっているのをたしかめると、強面の男たちを雇ってトラックで乗りつけ、力づくで用紙を回収した。まるでヤクザ映画を見るようだが、労働運動初期のアナーキーな行動である。配本の不足分は、小野が持ち帰った見本刷りから急遽オフセットで作ってしまった。印刷屋が警察に訴えたので、貴司と丸山は呼び出されて事情を訊かれた。貴司にとって、こんな尋問は慣れている。ひ弱なインテリとは異なる一面をみせた（「日記」三三六年一月八―二二日）。

この二月号には、小野春夫が初めて「牛蒡」という六〇枚の中編を書いた。中国地方の雪深い山村の被差別部落の留吉は伯樂を生業としている。部落の娘の結婚を「ごんぼうの嫁」と呼んだ地主の三男坊の差別発言に抗議して小作料減免を要求する寄合が開かれているのを横目に、留吉は抜け駆けで地主の使いを引受け、一山越えた町に繭を届け、その集金までまかせられた。この部落は墓掘りの隠亡で、留吉が牛蒡好きだということにややユーモアが感じられるとはいえ、全編は繭を積んだ馬車を操って山の雪道を駆け抜ける自然との闘いと、銀行で受取った金を落とすかもしれないという貧乏人の不安のサスペンスである。

「峠にかかると、雪は風さえ加ってまともに顔を向けられぬ程荒れ狂った。ごをっ！と地響きを立って吹き下ろしたか

と思うと地上に落付く間もなしに捲きあげられて、それが山の中腹で後から吹き下ろされて来る雪の嵐と一しょになってぐるぐるともみ上げたり、時には谷と谷の間一帯に雪の竜巻を作って峰の方へ白い柱を立てたように吹き上げることもある。その度に冷たい風が毛布の裾を捲き上げて雪が吹き込むので留吉は始終前をかき合せながら、屈んで歩かなければならなかった。彼の手足はだんだん凍えて感覚をなくする迄に凍えてしまった」

こうしてやっと町の工場に繭を届け、小切手を受取り、指示された銀行で現金に換え、胴巻にしっかりと仕舞い、もともと来た道を辿るのだ。銀行に初めて入る不安、「ごんぼうが牛蒡を買った」といわれないためにこっそりと好物の牛蒡を正月の買物荷の下に積み、坂を下り、雪明りの凍てついた道を滑る車は速度を増して横転……留吉といがみあつてきた被差別部落の人たちはわだかまりを捨て、留吉の搜索に力を合せる……

農民文学とも、プロレタリア文学としても本道のテーマからは少し外れているように思える。描写は自然主義的だが、郷里に近く農民組合のオルグとしてまわった経験が生きて、構成にやや難があるとはいえ、なかなかの力作である。

*

二・二六事件が、日本社会の転換点だったろう。この日、貴司は午後の事務所丸山から、事件を知らされた。外回り

の小野は情報を集めてくる。それを聞いて貴司は考える。この事件をきっかけに「合法的にファシズム的政治段階へ一足飛びに行ってしまう」かもしれない。「今夜あたり戒厳令になることは明かだ。そうすれば雑誌の四月号の中身が今のままでは差し支える」。「行動主義文学再建座談会」中のファシズム批判はそのままとして、「ソヴェート文学現状総覧」は当分引込める、赤系分子の保護検束にそなえて、編集部員は事務所と自宅から姿を隠す。多くの修羅場をくぐってきた貴司の機敏な判断であった。(「日記」二月二十七日)

事件の影響は徐々に現れる。新築地劇団の四月公演の「恐怖」が戒厳令のために中止になったので、かねて依頼していた「間宮林蔵」を急遽書き下ろしてほしいといってくる。貴司は三月二〇日に速記者相手に「洋学年代記」と題して二百枚を終日口述筆記して、間に合わせてしまう。この「洋学年代記」は『文学案内』五月号に一挙掲載された。

事件の後、創刊当初五〇〇人だった誌友が、三〇〇人に減った。売上は平均四割七、八分、これでは原稿料も編集者の給料も出ない。そこで出版部を作り、売れ筋の単行本を出す。新聞社への文芸、学芸記事の供給、作家の紹介を始める(三六年七月号)。そして六月の「日記」には、方々に金策に駆け回っている記述がみられる。

「文学案内創刊一周年記念出版」として、売れ筋の単行本「両眼も両足もない無名の一労働青年が書いた驚嘆すべきプ

ロレタリア小説!」オストロフスキーの『鉄はいかに鍛へられるか』を出版した。稲田定雄らのロシア語学者たちが共同翻訳したものを、かねてから翻訳の読み難いことを批判していた貴司が日本語としてブラッシュアップするのである。単行本の奥付は「昭和十一年七月八日印刷納本、七月一二日発行」だが、七月二五日に発禁となった。本は発行日より前に作り、誌友に配本済で損害は少なかったが、第二部は発表できず、訂正本を出すことも不可となった。

この小説は『文学評論』でも杉本良吉訳ですすめていたものである。雑誌連載か単行本かということで、両者の抜け駆けの応酬があり、九月号には丸山義二が「文学評論の宗派主義的傾向に対して」と題して、「正統派的立場」を装う『文学評論』派の傲慢さに批判を浴びせている。

さらに、丸山が第二弾の批判を用意していた八月九日、『文学評論』の発行元ナウカ社の社長大竹博吉が軍機保護法、治安維持法違反容疑で逮捕された。貴司は逮捕の本質は出版弾圧であると判断し、遠からず文学案内社へ波及するとの見通しで、編集方針を後退させてもあくまで合法性を守るという方針を再確認した。しかし急進性の後退はさらなる部数減につながる。貴司はさらに執筆量を増やして資金を稼ぐ決意を編集会議で述べた。(「日記」八月九〜二二日)

九月号の読者の投書をのせる「アンテナ」欄には、柳瀬正夢の「表紙の絵が時節柄尖鋭すぎる。そのため買って持ち帰っ

ても親や近隣の青年に見られた時、極左じゃないかとあやしまれる」ので、表紙をやわらかくしてほしいという労働者の投書に、編集局から、一〇月号から一新すると答えている。世間はすでに自粛の方向に向かっているのだ。

一二月号は、文学案内編集部より中国文芸家協会へ「魯迅を哀悼す」と題して格調高い文章を載せた。また雑誌『詩人』停刊の広告も載り、おいつめられている様子がうかがわれる。「日記」の記述もまばらとなり、止められた電話を回復するためにカメラを質入れして、三五円作るさまも書かれている。「日記」一月二〇日)

「社内日より」には「文案社創立以来朝の九時から夜の一時まで日曜日まで出てきていた小野君はとうとう神経衰弱になり、一二月まで休養し、小説を書くと言って友人のツテで佐渡へ行っている。佐渡はいいとみえもう一月近くなるのに、行ったきりかえてこない。但し向こうからきたエハガキには「銀座のコーヒーがのみたい」と書いてある」と載った。

小野が佐渡に行ったのは、北吟吉の紹介による。俳優の浜村純と一緒に。浜村の特異な風貌は島では目立ち、ロシアのスパイだと疑われて警察の尋問を受けたという。

三六年一月二三日に貴司は「原稿を送る速達の金もなく、このごろは貧乏にすっかり馴れてしまった」と書き、「日記」の記述はこれ以後一年とだえる。三七年一月二七日に治安維持法違反で検挙、年末まで淀橋署に勾留されたので

ある。

三七年二月号の人事消息には「創立以来の社員で九月以来休んでいた小野春夫君は、十二月末日かぎり退社されることになりました。今後は創作に精進してもらって、同君の力作を『文学案内』にのせたいと思います」とある。

さらに三月号には、丸山が一月早々疲れたからといって退社し、「人手不足のところ、貴司が病気で休養」と、遠地輝武が書いている。逮捕勾留とは公表せず、遠地が一人で編集を引受けることになった。この号には、魯迅が「藤野先生」で大変な恩人として書き、もう一度会いたいと言っていた藤野殿九郎を訪ねあてた『文学案内』の読者による記録とともに、「謹んで周樹人様を憶ふ」という藤野殿九郎自身の文章を載せた。日中戦争の激化の中で、実に心温まる話である。

5 転身

四月号には、「貴司山治君の身边に若干の変動が起り、甚だ面倒な状態におかれました……創刊当初の意義と従来の編集方針とを忠実に生かして行き度いとは考えていますが、四囲の事情は、到底それを許す情態におかれていないことは、自明であります」という遠地の悲痛な「社告」が載った。

小野の「島の名子」は、この号に載った。佐渡ヶ島の北端に近い真更川河口の藪という被差別地域の農奴ともいふべき名子の物語である。善平は主家の日雇人としてわずかな食糧

をもらうのだが、郵便の集配まで背負わされた。冬は雪に閉じ込められ、春は潮の影響で湿気がひどく、栄養をとれずに過酷な農作業に従事するため、病気が蔓延する地域。三六歳の善平は、主家の許可を得て、行き倒れの白痴の女を嫁にする。女は息子梅三を残して死んでしまう。すると主家は身持ちの悪い太った嫁を押しつける。それが連れ子ばかりをかわいがり、梅三には飯もろくに食わせない。主家に頭のあがない善平は、梅三と佐渡の民謡安寿と厨子王を歌い嘆くばかりだ。隠曆二月二〇日の雪が凍りつく風の強い夜、梅三は折檻されて外に放り出される。崖の上には足跡が残されていた。善平が狂ったように探しまわるところへ、男と密会をした嫁が帰ってくる。善平は斧を嫁の頭に振り下ろし、崖から飛び込んで死ぬ。外に出て行った連れ子も凍死……前作にもまして救いのない暗い話である。しかし梅三は主家の納屋に潜んでいた。名子の老人がみつけたが、主家の女主人は軽蔑するように眺めただけだった。

最後に「長編『佐渡ヶ島』の一部をなすもの」と注記されている。階級的に目覚めることなど出来そうもないほどに、差別されて孤立した底辺の人間の絶望から、怒りを爆発させる状況を執拗に描いている。自然描写はよく書きこまれて、重い文体が辺境に生きる人びとの本人たちが気づきもしない鬱屈の心情をあらわしている。しかし、プロレタリア文学としても、下層の農民を描くにしても、時局がら歓迎されない

作品ではないだろうか。

貴司は獄中から、三月号で廃刊にしようとしてきた。遠地は、四月号を詩と小説満載の分厚い終刊号にしようとして試みたが、諸般の事情で普通の構成となった。三月二日に、トラック一台に社の持物すべてを積んで、吉祥寺の貴司家に送り届けた。二〇日には最後の事務員も去った。遠地一人が隣の新築地劇団の一角に机一つ間借りして、残務整理を行う。

*

丸山義二は「田螺」を一月号に発表して去った。最後の農民プロレタリア小説ともいふべき「貧農の敵」の作者のほとんど同時期に書かれた「転向小説」といってもいいものである。勤めていた雑誌社がつぶれ、一月前に生れた赤ん坊に死なれ、姫路から先の郷里に母に金策を頼むために帰る。農村はすでに人生の遠景でしかない。この巧みに書かれた私小説は、『文学案内』のめざす方向とは全く異なっていた。丸山は、それが息苦しくなる日本社会で作家として生き残る道だと思ったにちがいない。

一九三七年一〇月に、丸山は書いている。「去年の暮まで、私は左翼的なある雑誌の発行名義人になり、そこでの編集で働いていた。しかし、その雑誌社から出していた文学と詩の二つの雑誌は、二・二六事件を契機として急激に読者数を減少したという有様で、経営は欠損つづきであった。そのため私たちはホンの二三人の社員で手にあまる仕事を果さねば

ならなかった上に、月々の報酬は五十円と取れず、なお時勢の風というものをいよいよ厳しく身に受けねばならなかった。正月になって三十五の年をかぞえた瞬間、私はその雑誌社をやめようと突然に決心した^③。

経済的問題よりも、世間の風潮におびえての退却という意識が「田螺」の道をまっしぐらに突き進むことになる。私はこの記述にいささかの同情とともに、見たくないものを感じるのである。

*

三七年末、貴司は淀橋署から釈放された。翌三八年は新年から、杉本良吉と岡田嘉子の樺太越境の亡命事件があり、「人民文庫」が廃刊となった。労農派教授らの大量検挙、左翼文学者の執筆禁止を感慨をもって眺めつつ、かなりの頻度で検事局へ出頭、取り調べを受ける（「日記」）。四月には、改造社に出向き、損害賠償を支払って、旧著の絶版、在庫の廃棄を頼んだ。

五月四日の「日記」には、検事局取調べで、「文学案内社の仕事全部共産主義の啓蒙活動だということになった。共産党再建の地ならしをしたのだと検事は調書に書いていたけれど、自分は黙っていた。……自分も文学案内社の仕事で実刑に問われたとしても、今の日本では仕方のないことだろう」と書く。五月二〇日起訴猶予の言渡しを受ける。「これで去年一年間の仕末がやっとついたわけだ」。前日には築地小劇

場で新築地劇団の『ハムレット』をみて、小野と会い、おでん屋でビールを飲んだ。

一月八日の「日記」。「きのう、丸山義二君たちは有馬農林大臣賛助のもとに「農民文学懇話会」を正式に結成したらしいようである」

丸山は、「イデオロギーにとらわれた農民文学の古い殻」を捨てた作品を書き、有馬頼寧農務相に接触、農民文学懇話会結成にこぎつけたのである。参加した作家たちは、農村に派遣されて現地報告を書き、満州開拓を煽り、国策に迎合した。丸山は四〇年に『庄内平野』を書いて、国策文学の華々しい旗手となっていった^④。

貴司の、一二月四日の「日記」。「実録小説ということを二年前に自分が唱えたが、それを作品であらわす仕事として、今日維新前より後に亘る時代に取材した長い架空のストーリーを考案する」

*

小野春夫は、『政界往来』三八年一月号に、「佐渡」を発表している。前作の「島の名子」注記にあるように長編「佐渡ヶ島」の一部ではなく、奇妙な重喜劇とでもいったような話である。舞台は同じ佐渡の北端、一回りも老けてみえる四五歳の牛の番人與平、なかなか器用な男で、險阻な断崖の海岸も飛ぶように走り回り、農作業も要領よく片づけてしまう。彼は心中者が出たといっって目を輝かす。女は虫の息だが持物

はい、男の溺死体の胸には分厚い財布がかかっている。検死は翌朝になるだろう。彼は夜を待って金を抜き取りに行こうと爛酒一杯で前祝い。漆黒の闇の藪を抜け、岩場を走り、洞窟に置かれた死体を探ると、ない！そこへ見廻りの足音が聞えて、逃げた。女房にむじな様へお供えをしなかったからだと毒づく。次の日、與平の嫌っている男が、紡績で胸を痛めた娘に三〇銭の薬を買ったことがばれて、駐在にひかれしていく。残りは六銭だった。心中者は、結局三六銭しか持っていないかったのだ。

小野は、丸山の農民文学に違和感をもって、参加への誘いに乗らなかった。中堅ともいえる丸山と違い、新人にとつては、国策に沿わない農民文学に発表の場はなくなるだろう。三八年には、芸術映画社で映画雑誌『文化映画研究』の編集とシナリオ執筆に参加していく。三九年一〇月には映画法が施行され、文化映画の強制上映の制度に、業界は勢いづいてきた。

芸術映画社は略称GES、父親の満鉄総裁大村卓一の出資で、三五年一月に大村英之助が創立した。英之助は、PCで映画の道に入った共産党員だった。芸術映画社は、左翼の溜り場ようになっており、中野重治の小説「空想家とシナリオ」に登場する映画会社でもある。

GESの社員であった谷川義雄は、「小野さんは現場にでることが好きでしたね。僻地でも農村でもよく現地の人に融

け込んでいた。『製炭報国隊』では構成となっているけれど実際は演出もやっていました。登録免許がないから表にはだせないけれど」という。⁵³

『製炭報国隊』は四〇年に松竹洋画系で公開された。積雪と雪崩と闘いながら木炭増産に励む青年たちの生活と意見を描くドキュメンタリーである。映画評論家津村秀夫は「大真面目だが歴然たる失敗作であまりに芸術写真的に凝り過ぎて、……青年たちのエネルギーが感じられない」と評しているが、フィルムが残っていないので、私には確かめられない。⁵⁴

*

三九年、貴司は、「埴生の宿」と仮題した歴史大衆小説執筆のために古本市に通い、史料を読み込み、読売新聞連載の心づもりで執筆を続けていた。しかし一二月九日になって、編集長は「年末から来年早々に、左翼系統の弾圧があるとの風聞に脅え」て、しばらく連載をみあわせると言ってきた。

ところが、四一年一月一五日から「維新前夜」と改題され連載が始まると、大反響を巻き起こした。連載は翌年九月二八日まで続き、連載終了の知らせが載ると、全国の販売店から正力松太郎社長に抗議文が殺到した。貴司はこの『維新前夜』を毎月一巻分書下ろし、隔月刊で刊行することを約束し、四四年五月に第七巻で終った。未完である。この間、四一年一月に妻恵津を亡くすのだが、この看病の「日記」はとても涙なくしては読めない。四二年再婚、四三年九月に内蒙古を

三月間放浪、四五年四月に京都の丹波山中に疎開、開墾に從事している。

*

四〇年一二月、「大東亜戦争を戦い抜き、東亜新秩序建設のために、国民精神を培う文化政策を推進する」ことを目的に、内閣情報部が内閣情報局として拡大組織化され、四一年五月に「国民映画」の脚本募集が行われた。応募作品は、時代劇四五編、現代劇一六四編、計二〇九編であった。審査には島津保次郎、溝口健二、田坂具隆、八木保太郎らの監督、脚本家が加って映画界の大きな話題となった。

小野はこれに応募し、「会津幼学所」が佳作入選^①。慶応四年八月会津落城、城下は焼払われ、人心は荒廃する。そのなかから、子どもたちの教育のための幼学所を建設する歴史映画のシナリオである。かなり細かく書き込まれた描写は小説に近いともいえる。

入選作八編が収録された『国民映画脚本集』には、助監督時代の黒澤明（「静かなり」）や、シナリオ修業中の新藤兼人（「天使の顔」）も入選しているが、総じて時局向けの国民精神高揚を露骨に謳うものはない。どれも少し真面目すぎると思われるのだが……

一九四三年には、『日本映画』一月号に中川順夫との共同執筆で、大政翼賛会企画文化映画シナリオとして「農村保健婦」が掲載されている。岩手の岩木山を背景にした啄木の碑

から、東北の農村の生活を淡々と描き、保健婦の活動を紹介してゆく正統的なドキュメンタリーである。中川順夫は監督だからか、すでにできあがったコンテのようにも読めるのだが、この映画は完成したかどうか資料がない。『上海』や『戦ふ兵隊』の監督亀井文夫は、治安維持法違反で一年の獄中生活ののち、監督資格を剥奪されているときに、小野に岩手の農村の仕事をもたらったと言っているが、この作品だとう確証はない。当時の文化映画の記録は、不完全でよくわからないことが多いのだ。四三年三月に芸術映画社は朝日映画社と統合しているが、戦場にかりだされた技術者も多く、映画製作は困難になっていった。小野も朝日映画からのちに日映に移籍される。その間にも史書を読み続けていたのだろう。

小野の『日露国防史——徳川中世期の苦闘篇』が四三年四月に東方書院から刊行されている。奥付には（第一巻）と記されているが、続刊は刊行できなかった。慶長四年から慶応三年に至るロシアと日本との国境、境界交渉を重層的に記述した歴史研究書である。続刊ができなくなったのは、六月に麻布の憲兵隊に逮捕され、二巻は印刷所で抑えられ、三巻以降の執筆は困難になったからである。^②

さらに、四四年一月終りに埼玉県籠原の農事試験場のロケハンのときに丙種合格の小野に召集がきた。二月一日に呉の海兵団に出頭、体格検査で視力聴力が足りず不合格、即日帰郷となった。^③ 四五年五月二五日の空襲で、阿佐ヶ谷の家

は全焼、大量の本と書きかけの原稿はすべて灰になった。この日、柳瀬正夢は新宿駅で焼死、小野は新婚の祝いに牛乳瓶にメダカを入れてもってきてくれたことを思った。柳瀬の描いた小野の肖像画も監獄裏を描いた油絵も焼失してしまった。小野の終戦の日の感慨を聞いたものはいない。

貴司は、終戦を入植地京都胡麻郷で午後になって知った。新聞号外を読み「涙わく」と日記に記している。

6 むすび

戦後になって、貴司は共産党に入党した。しかし非転向のみを神格化して硬直した党は、貴司の不定形の問題を必要としなくなっていたのだろう。いまでは、『文学案内』三十六年二月号に「小林多喜二・作品の再吟味」を特集したことも、文字通り生命を賭けて編集した『小林多喜二全集』のことも、正統派の文学史には見当たらない。貴司は死に至るまで、小説を書き、日記を書き続けた。伊藤純によれば、「私の文学史」と題して、上京したところからの回想を書き始めたのが六〇年代中ころであった。しかし病気の進行とともに、文字の乱れが激しく、最初の投獄までで判読できなくなったという。一九七三年一月二〇日、脑梗塞のため死去、享年七三。

丸山義二は、敗戦を聞き、自分が小説で駆り立てた満州開拓民の末路を知り、小説の筆を折り、後半生を農業ジャーナリストとして送ることになった。私は、六八年の『種をまく

人』（家の光協会刊）に描かれた名利を求めずひたすら農業技術や農作物の改良に努めた人たちの生涯に感動した。調査の行きとどいた平易な文章である。七九年八月一〇日、心不全のため死去、享年七六。

記録映画の脚本を書くことを仕事にして戦後を生き、小野春夫は、七二年に児童ものの歴史小説『マタギの里』を書いた。綴り方運動で逮捕された戦前からの友人来栖良夫にすすめられたのである。それから一年に一冊くらいのペースで少年歴史小説を書いていった。木曾、飛騨、阿波などを舞台とする物語は若いころの気張った文章ではなくなっていた。

最後が『エゾシカの原野』だった。あとがきにいう。「映画のしごとで、日本の炭鉱をまわり、北海道の空知の鉱山をみて、釧路にいったのは、昭和二十三年でした……」^⑧脳裡からは日本の田舎が消えることはなかったのだ。八六年四月二三日、肺炎のため死去、享年七八。

*

雑誌『文学案内』は、貴司山治の作家・編集者・運動家のすべてを賭けた「作品」であった。本稿はその一断面を上京した時代の少し違う上京青年の人生の交錯から考察するつもりであった。しかし見通しが狂い、約三倍の草稿を切り刻むことになり、とくに終刊以後は筋書きのようになってしまったのが心残りである。

- ① 『文学案内』は、二〇〇五年に復刻版が不二出版より、全十巻で刊行された。本稿の引用はそれによる。また「貴司山治日記」は、二〇一一年に『貴司山治日記DVD版』として、同じく不二出版より刊行された。本稿では、「日記」と略称し、年月日を表示した。なお一九三四年から三八年までの日記は、貴司山治研究会編『貴司山治研究』（二〇一一年、不二出版刊）に翻刻されている。本稿の引用は、新字新かなとした。
- ② 小野春夫の履歴については、一九八〇年五月の聞き書きによる部分が多いが、特別に注記しなかった。
- ③ 農民運動史研究会編『日本農民運動史』一九七七年、お茶の水書房、青木恵一郎『日本農民運動史』第四巻、一九五九年、日本評論社による。
- ④ 『現代日本文学全集・第六十二巻』（プロレタリア文学集・貴司山治篇）、一九三二年、改造社。
- ⑤ 貴司山治「わが文学史」『貴司山治.net資料館』（<http://www.kishiyamaji.com>）
- ⑥ 尾崎秀樹『大衆文学論』一九六五年、勁草書房。
- ⑦ 山田清三郎『プロレタリア文学史・下』二九八頁、一九六八年、理論社。
- ⑧ 「わが遍歴（未定稿）」は、『日本プロレタリア長編小説集（3）ゴー・ストップ』一九五五年一月、三二書房刊に収録。
- ⑨⑩ 伊藤純「小林多喜二全集の編纂過程」、「貴司山治と小林多喜二」『貴司山治.net資料館』など参照。
- ⑪ 丸山義二に関しては、主に名倉保夫『ものかき六〇年・農民作家丸山義二の生涯』一九九九年、名倉保夫自費出版による。
- ⑫ 浜村純聞き書き。一九九四年二月二五日。
- ⑬ 丸山義二「葎屋根記」『早稲田文学』一九三七年一〇月号。名倉保夫の著書より重引。
- ⑭ 佐賀郁朗『受難の昭和農民文学』二〇〇三年、日本経済評論社。
- ⑮ 谷川義雄「十五年戦争下の文化映画」『講座日本映画5』一九八七年、岩波書店。谷川義雄聞き書き、一九八六年八月。
- ⑯ 津村秀夫『続映画と鑑賞』一四九頁、一九四三年、創元社。
- ⑰ 「情報局選定・国民映画脚本集（第一回）」一九四二年、東亜書林。筆者名は、目次には小野勝也、本文には真木英助と表記されている。
- ⑱ 小野和「私の場合」草の実会第七グループ編『戦争と私』一九六三年。
- ⑲ 小野春夫「召集のがれ」、日本児童文学者協会編『生きとてよかった』一九七九年、草土文化。
- ⑳ 小野春夫『エゾシカの原野』一九八三年、新日本出版社。